

## 船山第1号墳発掘調査の概要

船山第1号墳前方部墳麓の開発計画に先立ち、4月19日から5月10日までの予定で、豊川市教育委員会では、この古墳の墳麓の確認調査を実施しています。その結果、古墳の裾まわりが、削平を受けずに比較的良好な状態で残っていることが判明し、また、2基の埴輪棺（はにわかん）の存在が確認されました。

### 1. 船山古墳群

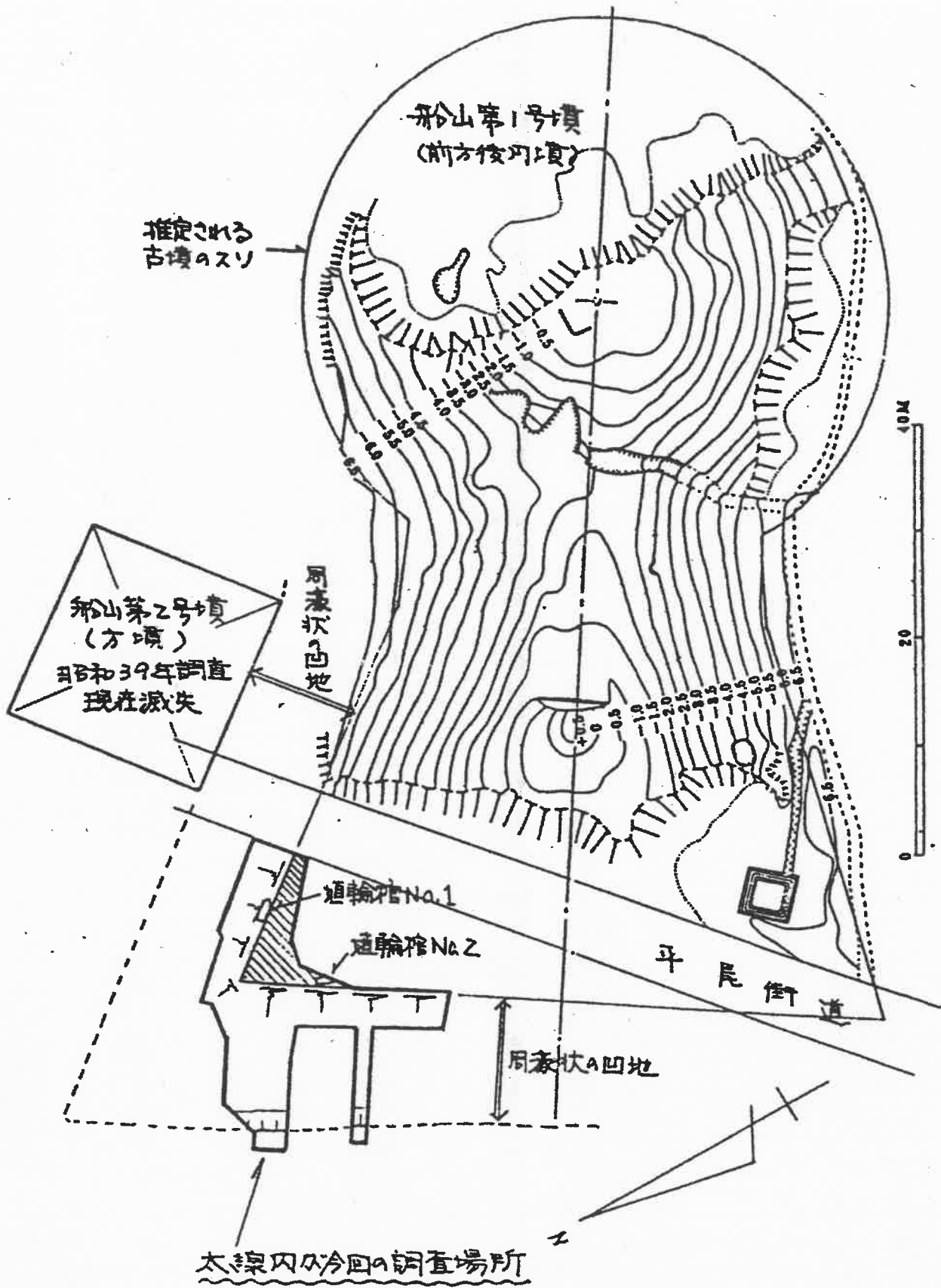
船山古墳群は、前方後円墳の第1号墳と第2号墳とによって構成されます。第2号墳については、残念ながら、現在その姿を見ることはできませんが、昭和39年の調査により、一辺19m前後の方墳であることが確認されています。第2号墳は、第1号墳の陪塚（ばいちょう）と考えられています。（右図参照）

### 2. 船山第1号墳

船山第1号墳は、三河地方で最大の規模を有する前方後円墳です。全長は、約90mをはかり、前方部は西北方向に開いています。過去、数度の発掘調査や測量調査が実施されてきましたが、主体部（中心部）の調査が行われたことはなく、その実態は不明です。

ただし、戦時中にくびれ部に防空壕を掘った際に、直刀・鉾・鉄鏃が採集されており、また、前方部南側の中段で、埴輪列も確認されています。このような出土遺物や古墳の形態から、この古墳は5世紀後半の築造と考えられています。

調査場所位置図



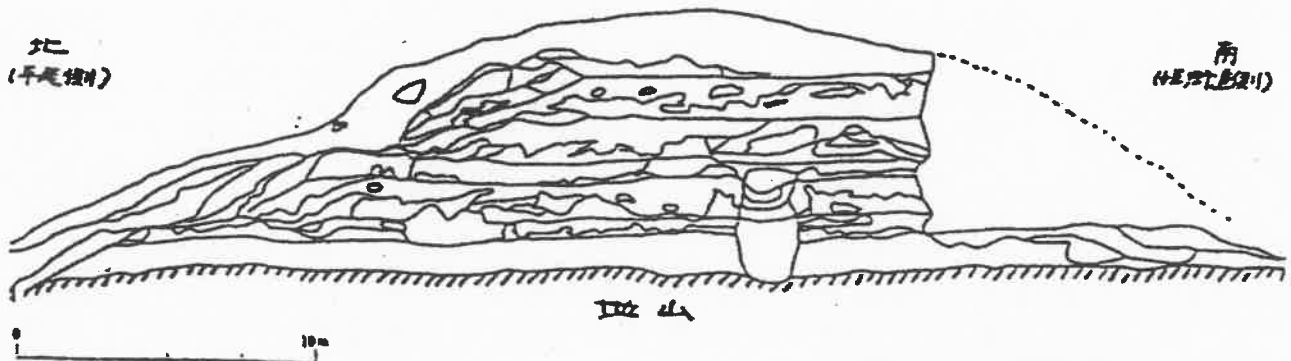
### 3. 今回の調査の成果

#### (1) 確認された前方部北側コーナー

古墳は、遺跡としては、地表にその姿を留めやすい性格を有しており、現在でも地表上でその形態を観察できますが、造られてから長い年月の間に、葺石（斜面を覆う石）は崩れ、古墳の裾には土砂がたまります。そのため、地表で観察しただけでは、古墳を造った当時の実際の裾の位置や大きさなどを正確に把握することが出来ません。

今回の発掘調査を行うことにより、長い年月の間にたまった土砂や葺石を取り除いて、古墳を築造した当時の姿を再現させました。その結果古墳の裾には人頭大の角礫を縁石として並べていることが判明し、削られずに残った葺石面の一部も確認することが出来ました。このように、古墳を造るときには、表面の土砂が簡単に流れないように、様々な工夫をこらしたことがわかります。

また、昭和56年に道路側の古墳カット面の断面調査を行った際には下図のような土層の堆積が確認されており、古墳を造る時に、赤土と黒土を水平になるように丁寧に積んでいったことが確認されています。



古土第1号墳 前方部横断面図

## (2) 検出された埴輪棺

埴輪棺は、円筒埴輪はにわかんや朝顔型円筒埴輪えんとうを利用して棺としたものであり

(まれに棺として使用する目的で特殊な円筒状の埴輪質の焼物を造る)

大規模な古墳の墳麓に埋没される例が多く、今回の調査でも、前方部の墳麓から検出されました。今回の調査で確認された2基のうちの埴輪棺No.1の内部からは、須恵器すえきの蓋坏ふたつきの身の部分とうすと刀子(鉄製の小刀)が副葬品として出土しており、土器の編年から、この埴輪棺が6世紀の半ば頃に埋没されたものであることがわかりました。つまり、この埴輪棺は古墳が造られてから数十年後に、古墳の上に並んでいる円筒埴輪を利用して埋没したものと推定されます。

ところで、この埴輪棺は、大きさから考え

大人の遺体をそのまま入れたものとは、とても考えられません。子供を葬ったか、あるいは一度土に埋め、骨だけにした大人の遺骨を葬ったものと考えられます。このような埴輪棺は、愛知県内では今のところ確認例が非常に少なく、貴重な発見となりました。

※これは、船山古墳出土のものではありません。



左・円筒埴輪 右・朝顔型円筒埴輪

## (3) 船山古墳のまわりに濠が巡る?

今回の調査によって、船山古墳の前方部北側コーナー付近には、古墳の外側に幅10m以上の周濠状の凹地が存在することが判明しました。

過去の2号墳の調査時にも、2号墳と1号墳の間に同様の凹地が確認されており、船山第1号墳の周囲には、周濠状の凹地がめぐる可能性が高いといえます。ただし、地山や堆積する土砂の状況から、水がたまっていたとは考え難く、空堀のようなものであったと思われます。